

はじめに

群馬県立土屋文明記念文学館は、平成8年の開館以来、貴重な文化的財産である本県出身の文学者及び本県ゆかりの文学者についての資料の収集・保管を継続的に行ってきたおり、その収蔵資料数は平成21年度末で約18万点に及ぶ。また、これらの資料を活用した様々な展示活動や教育普及活動を通じて、県民への文学の理解と普及を図っており、多くの県民に利用され親しまれているところである。

しかし、こうした一方で、厳しい財政状況を踏まえ限られた資源を有効に活用するため、平成20年3月に「群馬県公共施設のあり方検討委員会」が設置され、県民の視点で公共施設の必要性を含めてそのあり方についての検討と見直しが行われた。文学館についてもその中で見直しが行われ、平成21年11月に下記内容についての答申がなされたところである。

この群馬県立土屋文明記念文学館「県民の意見を聞く会」は、こうしたあり方検討委員会の答申の趣旨を踏まえて設置されたものであることから、この「県民の意見を聞く会」においてまとめられた意見については、県及び文学館はその内容を真摯に受け止め、今後の文学館運営に積極的に取り入れるよう努力するとともに、さらに県民から親しまれる施設となるよう取り組む必要がある。

記

【公共施設のあり方に関する最終報告書 一抜粋一】

(1) 施設の必要性について

土屋文明記念文学館は、本県の文学に関する中心施設として、県民に対して様々な情報を提供するとともに、貴重な資料の収集に努めており、その設置目的は今日においても失われていないと考える。施設の今後のあり方としては、継続することが適当であるが、入館者数はピーク時から半減し、観覧者数で見ると、年間1万人に達していない現状である。

本施設は、その館名から、個人文学館のイメージが強いが、実態は総合的な文学館であり、その機能を高め、また、利用者の増加を図るため、館名変更を含めて、文学館のあり方について専門的視点及び県民の視点から検討する必要があると考える。

(2) 管理運営方法について

- ① 本施設に対して県民が求めるサービスを再検討し、施設の位置付けを明確にした上で、提供するサービスについて重点化していく必要がある。
- ② 職員体制（嘱託を含む）について、入館者数や業務内容を踏まえた分析・見直しを行う必要がある。その際には、ボランティアの積極的な活用も検討されたい。

(3) 管理運営主体について

- ① 歴史公園内に位置しており、公園全体としての機能を発揮させる観点から、施設相互の連携方法等について、高崎市とよく話し合いをする必要がある。
- ② 県直営による管理運営が適当であると考えますが、民間のノウハウを活用する観点から、指定管理者制度について、他県での導入、活用状況など、情報収集に努められたい。

I 群馬県立土屋文明記念文学館「県民の意見を聞く会」の設置について

1 設置目的

群馬県公共施設のあり方 検討委員会の最終報告を踏まえ、県民に魅力ある群馬県立土屋文明記念文学館の運営を検討するため、設置する。

2 委員会の組織

氏名	職業等	分野
新井亞夫	(社)群馬ペンクラブ理事	専門家・研究者
石井節子	高崎市文化協会群馬支部長	地域活動者
石川泰水(座長)	群馬県立女子大学文学部教授	教育関係者
風間まり子	(株)カザマ技研開発専務取締役	一般県民
塩崎猛雄	元前橋南高等学校校長	教育委員会関係
中島守	高崎市市長公室文化課長	地元市町村関係
藤井浩	上毛新聞社論説委員長	広報関係者
真塩光枝	(農)国府野菜本舗代表理事	一般県民

3 委員会の開催状況と内容

回	開催日	検討内容等
第1回	H22.8.2	・文学館の概要・運営状況・課題等について ・館内視察 ・意見交換
第2回	H22.8.23	・意見交換 (広報活動等について)
第3回	H22.9.30	・これまでに出了された意見整理 ・意見交換 (展示のあり方等について)
第4回	H22.11.1	・意見交換 (館名変更等について) ・報告書の内容について

Ⅱ 文学館の現状

1 現状について

(設置目的)

- ・土屋文明の業績を記念し、文学に関する県民の理解を深め、もって教育、学術及び文化の発展に寄与する。

(立地環境)

- ・施設のある高崎市保渡田町は、アララギ派を代表する歌人で名誉県民でもある土屋文明の出身地である。
- ・施設は高崎市立「上毛野はにわの里公園(歴史公園)」内に設置されており、施設の敷地は高崎市からの無償借用である。
- ・公園内には国指定の古墳群や高崎市の考古博物館である「かみつけの里博物館」が、また近隣には県立「日本絹の里」がある。

(建築・設備)

- ・開館は平成8年7月11日、平成11年6月3日には博物館登録を受けた。建物は鉄筋コンクリート造り2階建て、延床面積は3,171㎡である。
- ・主要施設としては、常設展示室 397㎡、企画展示室 185㎡、特別展示室 95㎡、研修室 289㎡、閲覧室 62㎡、収蔵庫 132㎡、書庫 222㎡がある。

(収蔵資料)

- ・群馬県出身の文学者及び群馬県にゆかりのある文学者についての資料を収集保管しており、資料点数は平成22年3月末現在で179,265点、うち土屋文明に関する資料は5,075点である。

(展示)

- ・常設展示では、土屋文明100年の生涯を作品や関連資料、移設した書斎などで紹介しているほか、「短歌の世界」コーナーでは、万葉の時代から現代までの代表的な歌人とその短歌を紹介している。
- ・企画展示では、年4回程度、群馬県出身の文学者及び群馬県ゆかりの文学者などを中心に、収蔵資料や借用資料などを用いて展示を行っている。
- ・巡回展示では、県内の公共施設等で文学館収蔵資料などを展示して、県民への便宜を図っている。

(広報)

- ・新聞、テレビ、ラジオ等を通じたパブリシティ、県広報紙や県ホームページへの掲載
- ・市町村広報紙等への掲載
- ・ポスター、チラシの関連教育文化施設、市町村等への配布
- ・文学館ホームページによる情報提供

(教育普及)

- ・企画展示に併せて講演会やワークショップなどを開催するとともに、文学の普及を目的とした「2000番地サロン」や「文学の教室」を開催している。また、学校

連携事業の一環として、小学生を対象に現役の詩人を学校に派遣して行う「詩作教室」や、県民の自主的な文学学習活動を支援するための「自主学習会」などを行っている。

(地域連携)

- ・近くにある「かみつけの里博物館」、「日本絹の里」との連携や地域との連携にも取り組んでいる。

(ボランティア)

- ・展示解説やミュージアムショップの運営、ティーサービスなど様々な分野に参加しているほか、夏休みには読み聞かせや紙芝居など子ども向けの事業も行っている。

(予算)

- ・入館者数がピークであった平成10年度には2億円余りあった文学館の当初予算も、平成22年度には、7千万円余りに減少している。

(入館者数)

- ・開館初年度が37,089人、その後、平成10年度の41,091人をピークに減少傾向となり、平成19年度には18,666人と最低を記録したが、その後やや回復して、平成21年度は22,624人となっている。

Ⅲ 文学館の課題等に対する意見

当委員会では、文学館の現状を踏まえ、館の優れた資源を活かしてより多くの県民に利用してもらうにはどのような方策があるかについて、検討を行った。

なお、議論を重ねていく中で提案された意見については、その方向性・項目ごとに整理・集約し、短期的視点から検討すべきもの、中長期的な視点から検討を要するものに区分して、当委員会としての提言とすることとした。

1 文学館のあり方について

【意見内容】

(1) 県文学の中心としての文学館の役割

- ・群馬の財産としての文化を創造し、継続・発展していくことが大切だ。
- ・総合文学館としての役割が果たせるよう、思い切った改革をしていくことが必要だ。
- ・県内文学館や図書館などの関係機関とネットワークを作って、情報交換や巡回展等の連携をしていくことが必要だ。
- ・県の文学賞や「みやま文庫」などを文学館に統一できないか。

(2) 館名変更に対する考え方

- ・県立文学館で個人名が付いているのは群馬県だけだが、設立時はそれが売りだった。
- ・県は、文学館の原点として土屋文明の名を大切にしてほしい（変更の必要なし）。
- ・現在地は土屋文明の出身地だから、土屋文明の名を完全にとってしまうと、文学館がここにある根拠がなくなる。
- ・土屋文明に限らず広く群馬県ゆかりの文学者を対象としている総合文学館として、より充実・活性化するためには館名変更したほうがよい（土屋文明の名前を併記してよい）。

<仮に館名変更する場合の案>

「土屋文明記念県立文学館」「土屋文明記念群馬県立近代文学館」「土屋文明記念群馬県立文学館」「群馬県立土屋文明記念総合文学館」「(群馬県立)土屋文明記念ぐんま総合文学館」「土屋文明記念群馬県立総合文学館」

- ・館名変更したからといって、直ちに入館者増に結びつくわけではない。名称については、遺族の問題などについて慎重に考える必要がある。したがって、急いで館名変更する必要はない。

【考察・提言】

(1) 県文学の中心としての文学館の役割

- ① 本県文学に関する中心施設として、総合的な文学館としての役割が果たせるよう運営すべきである。(短期・中長期) ※
- ② 県内文学館や図書館等の関係機関とのネットワークを作り、情報交換・巡回展等の連携を図っていく必要がある。(短期・中長期)
- ③ 県の文学賞や「みやま文庫」の文学館への統一については、各賞等のこれまでの経緯や状況を把握した上で、関係機関と調整・検討されたい。(中長期)

(2) 館名変更に対する考え方

- ① 地元をはじめ関係者の意向等の把握に努める必要がある。(短期)
- ② 館名変更が直ちに入館者増に結びつくとは考えられないので、中長期的な視点に立って、館名変更に伴うメリット・デメリット等を総合的に勘案し、慎重に検討していくことが望ましい。(中長期)
- ③ 館名変更する場合も、何らかの形で土屋文明の名前を残すことが適当である。(中長期)

※短期（短期的視点）、中長期（中長期的視点）

2 展示のあり方について

【意見内容】

(1) 常設展示

- ・文学館の常設展示は、美術館のような大幅な展示替えは難しい。
- ・現在の土屋文明の常設展示を多少変更しても入館者増は難しい。
- ・土屋文明だけでなく、県立の総合文学館としての役割を果たせる常設展示が望ましい。
- ・企画展示室の一部を利用して、開館当時に開催していた本県ゆかりの文学の展示を再開できないか。
- ・常設展示のリーフレットを展示解説のダイジェストとして活用してほしい。
- ・土屋文明の展示について、視点を変えた展示や展示解説があれば面白い。土屋文明の妻から見た視点や生きた年代や季節など視点が変わった展示、ボランティア等による展示解説があれば、もう一度見たいということになるのではないか。
- ・古今・新古今和歌集のような価値のある資料について、展示をもっと工夫すべきではないか。

(2) 企画展示

- ・美術館のように他館との巡回展や収蔵品借用等を行う必要があると思う。
- ・学芸員による企画展のギャラリートーク（展示解説）が効果的と思う。
- ・文学館は、これまでも新しい発想で、紙芝居展、女性誌展、茨木のり子展など全国にアピール出来るだけの内容の企画展を行っているが、これを継続していくことが大切である。
- ・県内の民間の文学活動との協力・連携や公の文化施設とのコラボレーションによる企画展なども検討してもらいたい（文学館と自然史博物館、ぐんま天文台など）。
- ・企画展は、企画の内容が大事なのはもちろんであるが、テーマや題名、広報の工夫など総合的な取り組みも大切だ。

- ・入館者増を図るには、女性誌展や茨木のり子展のような女性をターゲットにした企画展を定期的に行う必要があるのではないかな。
- ・絵本の原画など視覚に訴える展示が効果的ではないかな。また、直筆の資料は、字の大きさやその人の癖などもわかるので、やはり訴える力がある。

(3) 収蔵品の活用等

- ・価値ある収蔵品(お宝)を工夫して展示してはどうか。
- ・収蔵品として既に持っているものや常設展の展示品について、見せ方を工夫して展示してはどうか。

【考察・提言】

(1) 常設展示

- ① 現状では大幅な展示替えは難しいので、視点を変えた展示・解説など展示方法の工夫により、リピーター確保に繋げる努力が望まれる。(短期)
(「5 ボランティアの育成・活用」参照)
- ② 土屋文明の展示だけでなく、県立の総合文学館として役割を果たせる常設展示のあり方を検討していく必要がある。(中長期)

(2) 企画展示

- ① 新しい発想で全国にアピール出来る内容の企画展を拡充・強化していくことが大切である。(短期)
- ② 視覚に訴えるなどの工夫により、文学資料が本来持っている力を引き出すような魅力的な展示を行うことが必要である。(短期)
- ③ 県内の民間の文学活動との協力・連携や公の文化施設とのコラボレーションによる企画展なども検討していく必要がある。(短期・中長期)
- ④ 文学館オリジナルの企画展に加えて、予算状況等も勘案しながらパッケージ展や共同企画による巡回展についても検討していく必要がある。(中長期)
- ⑤ 入館者増を図るには、女性をターゲットにした展示などを定期的で開催する必要がある。また、ギャラリートーク(展示解説)も有効である。(短期)

(3) 収蔵資料の活用等

- ① 収蔵資料について、見せ方を工夫しながら展示していくことが望まれる。
(短期)

3 文学館機能の充実について

【意見内容】

(1) 資料収集について

- ・他の県立文学館と比べて収蔵庫等が狭すぎるのではないかな。
- ・県立の総合文学館として相応しい規模の収蔵庫・書庫を整備すべきである。
- ・資料購入予算が少ない。1年に1回しか使われないものであっても、文学館が収集管理しておくべき資料があることを理解すべきだ。

(2) 連携について

- ・全国の文学館との情報交換や連携が必要と思う。
- ・学校連携について、学校への個別訪問や校長会等を通じて連携強化を模索する必要がある。また、小中学校・学生を巻き込んだ教育普及活動が大切である。

- ・地域連携を図り、歴史遺産を含め地域の観光資源を活用してはどうか。
- ・地域の類似施設（かみつけの里博物館、日本絹の里）について、企画展等に関連した連携、スタンプラリーや三館共通割引券などを検討できないか。また、伊香保の宿泊客等を対象に、観光コース、はとバスツアー等の連携が図れないか。

（３）企画力・専門性の拡充について

- ・県立の文学館に正規職員の学芸員がいないのはおかしい。専門職の充実が必要だ。
- ・専門性・企画力・人脈を持った方々と一緒に企画を組み立てていけば、集客にも繋がるし魅力アップになる。
- ・文学館のアドバイザーについては、企画運営委員会にするのか監修者にするのか、よく検討する必要がある。

（４）その他

- ・群馬文学全集は、文学館の素晴らしい事業成果なので、もっと PR してもらいたい。
- ・文学館ならではのオリジナル商品を作ってはどうか。例えば、上毛かるたの紙芝居であれば、学校の授業にも出てくるのでヒット商品になるかもしれない。
- ・アンケート調査で来館者のニーズが把握できるのではないか。

【考察・提言】

（１）資料収集について

- ① 資料収集にあたっては、寄贈の選択的な受入など効率的な収集・保存方法を工夫するとともに、総合文学館としての機能が図れるよう、将来的には収蔵庫・書庫の増改築を検討する必要がある。（短期・中長期）
- ② 資料購入予算を充実させる必要がある。（中長期）

（２）連携について

- ① 全国文学館協議会等を通じて、情報交換・連携していくべきである。（短期）
- ② 学校連携については、「新学習指導要領」に合わせた教育普及事業の計画等により、学校が利用しやすいよう環境を整えて推進する必要がある。（短期）
- ③ 地域連携については、地域のイベントとの連携や歴史遺産などの観光資源の活用を図るとともに、「かみつけの里博物館」、「日本絹の里」との三館連携を推進する必要がある。（短期）

（３）企画力・専門性の拡充について

- ① 専門性・企画力・人脈を持った県民や文化団体等と広く連携を図る必要がある。（短期）
- ② アドバイザーの設置にあたっては、文学館の主体性との関係を十分検討する必要がある。（短期）

4 広報活動の充実について

【意見内容】

（１）文学館ホームページの充実

- ・インターネットは年齢に関係なく利用されている。インターネットの普及に対応して、更なる文学館ホームページの充実を図る必要がある。
- ・視覚に訴えるホームページ作りが効果的だ。
- ・文学の理解は難しいので、メーリングリストを使った双方向のやりとりやブログな

ども出来る範囲で検討してみてもどうか。

(2) 関係機関・地域等への広報活動の充実

- ・ 広報はしているが、地域住民の心に響いていない（効果が上がっていない）。
- ・ 高崎駅等にポスターやチラシを置いた方がよいのではないか。
- ・ 県議等にきちんと情報提供・視察してもらい、文学館を理解してもらうことが大切である。

(3) マスコミへの情報提供及び広告費の確保

- ・ 新聞記事は広報効果が大きいので、一層活用して欲しい。
- ・ 新聞記事は、広告手段とは本来別のものである（広告費を確保すべき）。
- ・ 広告費がないのに驚いた。きちんと広告費を確保するべきではないか。

【考察・提言】

(1) 文学館ホームページの充実

- ① 文学館ホームページの構成見直しや頻繁な更新を行うなどして、一層の充実を図る必要がある。(短期)

(2) 関係機関・地域等への広報活動の充実

- ① 市町村広報紙や各種メディアへの掲載の拡充を図るとともに、量的側面のみでなく、受け取る人の心に響く質的側面にも配慮した効果的な広報を行う必要がある。(短期)
- ② 高崎駅等への広報を充実させるべきである。(短期)

(3) マスコミへの情報提供及び広告費の確保

- ① 新聞等のマスコミに対し、より効果的な情報提供等を行う必要がある。
(短期)
- ② 広告費を確保して広報すべきである。(短期・中長期)

5 ボランティアの育成・活用について

【意見内容】

(1) ボランティアの育成・活用

- ・ 解説ボランティアによる展示解説があると効果がある。もっと増やせないか。
- ・ ボランティアの会が解散となったのは残念だ。ボランティアの会が必要ではないか。
(会は平成17年に解散になったが、現在、11分野・約100名のボランティアが活動している。)
- ・ ボランティアが主催で、館内ロビーで定期的にコンサート(2000番地コンサート)を行っており、多くの人に文学館に来てもらっている。

【考察・提言】

(1) ボランティアの育成・活用

- ① 展示解説をはじめとして、さらなるボランティアの育成・充実・活用を図る必要がある。(短期・中長期)

6 来館者アクセスの向上について

【意見内容】

(1) 駐車場の確保等

- ・施設規模に比べて駐車場が不足している。特に企画展イベントや講座の時に不足する。駐車場の確保が必要ではないか。
- ・通常の開館日は、特に不足しているとは言えない。

(2) 文学館インフォメーション

- ・タクシーやバスの運転手が文学館を知らない。バス会社やJRなどの関係機関に情報提供・広報していく必要があるのではないか。

(3) その他

- ・高崎市バス「ぐるりん」のダイヤ改正で不便になるが、高崎駅からの乗り継ぎの工夫等のアクセス案内をする必要がある。

【考察・提言】

(1) 駐車場の確保等

- ① 公園を管理する高崎市やかみつけの里博物館等と情報交換・調整を行い、効率的な駐車場利用に努めるとともに、駐車場の確保について検討していく必要がある。(短期・中長期)

(2) 文学館インフォメーション

- ① 文学館ホームページに館の道路案内や公共交通機関等について、わかりやすく掲載する必要がある。(短期)
- ② 地域のバス会社や駅の観光案内所等を訪問し、文学館の認知度を高めるよう情報提供していく必要がある。(短期)